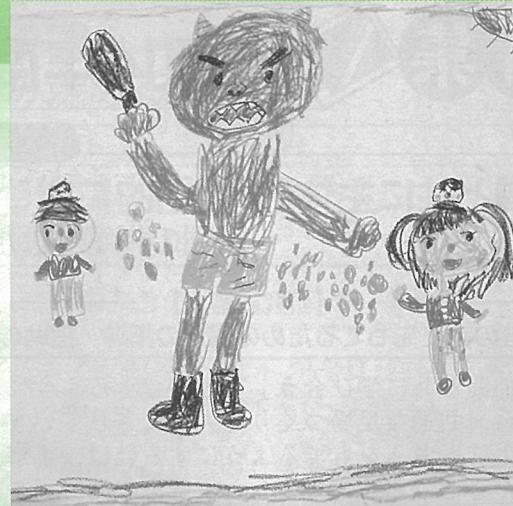


恵那市教育研究所だより

えな



「怖かつたけど、豆まき頑張ったよ！」

串原こども園 5歳児 三宅

楓香

経験値を高めたい



今、話題の「Chat（チャット）GPT」なるものをやってみた。これは、人工知能のなせる業で、文字で質問を打つと、まるで人間とやりとりしているかのように、丁寧かつ人間らしく解答してくれるという大変面白い技術である。最初はおそるおそる真面目なことを、

次第にくだけたことを質問していった。こちらのニーズに応じた文章例をいくつも教えてくれるし、一昨日は家族が家事を進んでやりたくなる声かけの仕方やタイミングについて助言してくれた。これは心強い、いろいろ使えると思った。教えてくれる文章については、まるっきりそのままを使うわけにはいかない独特の硬さがあるが、文章組立てのベースにできるため、仕事効率は上がりそうだ。この技術は子どもも含めて、様々な挨拶や通信、作文等で使われていくことが容易に予想できた。以前は人間しかできないと思っていた「考えて書く」分野にいよいよAIが入ってきたのだ。こんな便利なものが目の前にあるのに、「これを使って作文を書いてはいけません」ともし規制したならば、それは子どもたちの成長に不利益となるだろう。どんな技術もまずは使ってみることが大事なのではなかろうか。

私は、これから教育に一層必要なのは経験値であると考えている。やったことがあるかないかがその人の学習能力や生活能力の深さを最終的に決めると思っている。知っているだけではだめで、例えば生徒会の役員が徐々にリーダーの顔になっていくのは、様々な場面で人の前に立ち、自分の考えを述べるといった鍛えの経験によるからであり、それはその子の将来を多かれ少なかれ形作ると思う。成功しようが失敗しようがそこから得た経験が、その人のもつ知識・技能の量や、見方や考え方に関わってくると思う。そうならば、子どもたちに多様な学びの機会や場を提供し、「やってみたい」と動機づけることが教育の肝なのではなかろうか。先述のChatGPTでも、子どもに実際使わせ、

恵那市副教育長 西尾 朋子

書いたものを読み返させ、相手意識、目的意識の高い文章に推敲したくなるようにもっていく方がずっといい。子どもの課題解決に対して、教員は子どもを導くファシリテーターの役割を果たすことが重要になってくる。

実社会では、大きく分けて「ワークマネジメント」と「ピープルマネジメント」の2つがあるといわれる。一人一人が意欲を高め主体的に判断し各自の強みを発揮することを促すためのマネジメントがピープルマネジメントである。学校ではまず、子どもが主体的に参加できるような集団の方向付けをすることである。学級経営でいえば、学級の一年間を見通し、最低一人一役は行事に関わることができるよう配慮するとか、日常活動における役割をもたせ、きちんと評価して子ども自身に仕事の大切さを実感させるとかそういういた営みである。かつての教科指導では、知識を教える教育の実践が積み重ねられ、子どもは記憶の再生で優劣が決まり、相対的に評価されていた。今は、子どもが教え合い学び合ってこそ、思考力・判断力・表現力がつくと授業観が転換された。互いに教え合う機会をたくさん設け、相手に説明することによって思考力・表現力・判断力を身につけることはその子の経験値の獲得につながる。次に、子どもがどこにやる気をだすのかをつかみ、子どもの変化や成長に目配りをしていく。そしてより力を発揮できる場を与えていく。あるときはリーダー、あるときはフォロワーと場面や役割にあった力を一人一人が発揮することの大切さが学べるようにピープルマネジメントしていく。このことによって、子どもはまずは小さな社会の中で、経験値を増やしていくことができる。さらに実社会に出てからも、「やってみよう」と自分の力を発揮することを厭わない社会人になると思う。そんな人達になってこれから地域社会を支えてほしいと心から願う。

令和5年度の市の事業には、「教育・発達支援センターの設置」「ICT教育らぼの設置」等がある。行政ができる環境整備を最大限生かして子どもの経験値を高めていきたい。

特集 令和4年度 恵那市指定研究発表 報告

恵那東中学校

仲間と共に主体的・対話的に学び合い、学びの深まりを実感できる生徒の育成 ～個別の指導・援助と学び合いの場の工夫を通して～

【研究内容1】

自分の考えをもてるための個別の指導・援助の工夫

「仲間と共に学び合う」ことができるよう、共通な土台、共通な足場づくりを大切にされていました。どの生徒も考えをもてるようにするには、丁寧な実態把握が必要であり、把握した実態を年間計画や単元計画を作成することや個別の指導援助計画を作成することに生かしていました。[図7]



[図7] 特別支援学級の授業の年間指導計画

- 特別支援の授業では、どの生徒も自信を持って発表することができていました。年間を通した計画を立て、今日の授業で一人一人がそれぞれの役割を果たし、交流ができるように、意図的な指導・援助がありました。
- 数学の授業では、一人一人が課題解決に向かって、それぞれの生徒なりの考え方をもつことができていました。机間指導計画を作成し、どの生徒も課題に取り組むことができるように、個人追究の場面で、効果的かつ能率的な机間指導を行っていました。

「仲間と共に学び合う」ができるようになるためには、共通な土台、足場が何かを明らかにし、生徒に示しておくことも大切です。既習事項を明示し、どの生徒も課題解決ができるようにしていました。

- 外国語3年生の授業では、ALTに対して自信をもって、人物を紹介する姿がみられました。既習表現や関係代名詞の仕組みをまとめたプレートを生徒に提示しておくことで、生徒自身が表現を磨くことができました。
- 理科の授業では、前時までの違いを意識して実験の見通しが持っていました。教師側が、前時までの実験との違いに気づけるようなワークシートをロイロノートに作っていました。

【研究内容2】

主体的・対話的に学ぶための学び合いの場の工夫

「仲間と共に学び合う」ができるよう、「確かめる」小集団学習と「深める」小集団学習というように<目的>をはっきりさせて取り組んでいました。

- 外国語1年生や外国語2年生の授業では、授業の最

初では単純な表現だったものが、仲間の良さを生かした豊かなものにプラッシュアップされて生きていきました。「確かめる」小集団学習と「深める」小集団学習を計画的かつ交互に位置付けていました。

学び合いを深めるための教師の意図的な指導（思考を繰り返すことができるような場の設定、深めの發問、教師からの促し）などを効果的に行なうことが大切です。

- 社会の授業では、授業の終末では、「恵那のダンボール産業」について、多面的な認識をもち、深い学びに到達していました。深めの發問を行うことで、授業の前半で3つの資料から認識を広げてきた生徒に、異なる事実を与え、生徒の「なぜ」を引き出すことができました。

目的に応じた小集団での活動という側面と、学びを深めるための教師の意図的な働きかけという側面の2つの側面によって、学びが深まるということを示すことができました。

【ICTの活用について】

「個別の指導・援助」と「学び合いの場の工夫」の2つの視点からICTの活用の仕方について取り組んでいました。

- 美術の授業では、作品の制作過程を写真で提出して共有していました。一人一人の現状と進捗状況を、教師も生徒も両方把握できることを可能とし、個別の指導援助を適切に行なうことや、生徒同士の学び合いを生み出すことにつながっていました。
- 国語の授業では、グループディスカッションでの意見の根拠となるデータをタブレットに保存することで、より客観的なデータを根拠に説明をする大切さを実感させることにつながっていました。
- 音楽の授業では、自分たちの合唱を録画や録音をして、共有機能を使って共有することで、何度も繰り返し自分たちの合唱の技能を確かめ、技能の高まりを実感することにつながっていました。
- 体育の授業では、バレーボールの試合の返球率をカードで集計し、共有ノートで共有することで、自分たちの試合を数値化し、データを元に、自分たちの課題に気づくことにつながっていました。

このように、個にフォーカスしたICTの活用と、集団にフォーカスしたICTの活用という2つの視点を授業者が意識することで、より効果的な活用ができることを学ぶことができることを証明できた研究発表となりました。



明智小学校
言葉を手がかりに 読み深める子

【研究内容 1】

单元指導計画の工夫

- (1) 単元を通して活用させたい「読みのて」及び一単位時間の役割を明確にした構造的な単元指導計画

児童が主体的に学習に取り組むことができるような単元構成の工夫がされている

单元全体を子どもの課題意識が貫いており、単元の一時間一時間がその課題を解決するために必要な一時間という位置付けになっています。そのことが、単元指導計画の中では「単位時間の役割」として示されており、単元の終末に向けて一時間一時間が計画的で意味のあるものとなっています。

さらに単元の終末には、それまでの読み取ったことを生かし、取り組む言語活動が用意されています。そのため、子どもたちは毎時間、単元終末の言語活動を意識しながら、学習への目的意識、課題意識をもって授業に臨むことにつながっています。

児童が主体的に学習に取り組むことができるような単元構成の工夫が、価値ある実践となっています。

【研究内容 2】

付けたい力にせまる単位時間の学習計画の工夫

- (1)「読みのて」を活用した主体的・対話的な読み取り
 - (2)本文の叙述を基にして本時の課題にせまる深い発問

「言葉による見方・考え方」を働かせて「資質・能力を育成する」学習過程を、実際の授業を通して示している

現行の学習指導要領の国語科の目標の中で、「言葉による見方・考え方を働かせる」や「資質・能力を育成する」という言葉が使われています。「言葉による見方・考え方」を働かせるとは、「児童が学習の中で対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い合わせたりして、言葉への自覚を高めることと考えられる」と学習指導要領に書かれています。言い換えると、教材の中で言葉や表現がそこで使われることの意図や効果を、教材の中での言葉の関係性の中から見出し、言葉を獲得したり、表現の意図や効果を考えたりすることであると考えられます。





低学年の授業では、「なりきって」という「読みのて」を使い、かにになりきったり、がまくん、かえるくんになりきったりして、子どもたちは叙述を基にして気持ちを考えていました。なりきることにより、文脈の中での言葉の意味を実感として理解し、言葉を獲得することにつなげられました。また、中学年、高学年の授業では、「調べ」「かくして」「おきかえて」「つなげて」といった方法を使い、文脈の中での言葉の意味を考えるだけでなく、なぜその言葉が使われているのかという書き手の意図や、その表現が使われることによって文章の中でどのような役割を果たすのかという表現の効果まで考えていました。

今回の実践が「誰にでも」できるように理論化され、体系化されている

「読むこと」の領域の授業が、「誰にでも」行えるように理論化され、体系化されているところに大きな価値があります。

研究発表会の配布資料の中に「言葉を手がかりに、読み深める子どもが育つ、授業づくりのための手引き」という資料と、「物語文指導モデル」、「説明文指導モデル」という2枚の資料があります。これらを見ると、「読むこと」の学習の中で、「読みのて」を活用しながらどのように読み取りを深めていくのかが大変分かりやすく示されています。

今回の発表に向けて、明智小学校では、研究で用いる言葉の一つ一つに学校なりの定義を行ったり、学習活動の一つ一つに意味付けをしたりして、研究主題の具現のために実践を積み重ねられました。何のための学習活動か、なぜ位置付けられているのか、どのような児童の姿を目指すのかといったことの具体が分かりやすく書かれていました。

「読みのて」レベル表(中・高学年)		
レベル	読みのて	つかひや見表の仕方
4 つなげて	言葉と言葉をつなげて考える	④生 「こんづね」 次の日も、その次の日も…だから、絶対に…。 「ほの日…」→「だから」でなく、「ほの」→つなげると、「ほの」と「だる」という言葉がよく似ています。
3 おきかえて	他の言葉におきかえて考える	⑤生 「おきかえむ」 「ひきかえむ」→「ひきかえむ」 「ひきかえしむ」→「ひきかえしむ」 「ひきかえしむ」→「ひきかえしむ」 ○○だから…だから…だから… 「いいなましく」があると、みんな喜んでいます。
2 かくして	言葉をかくしてちがいを考える	⑥生 「かくす」 「かくす」→「かくす」…だから想像されるけど、「いまいましく」があると、みんな喜んでいます。
1 しらべて	言葉の意味をしらべて考える	⑦生 「さがねる」 「さがねる」→「さがねる」

レベル	読みのて	かべるひょう 「読みのて」レベル表(低年生)	使い方や発表の仕方
2 つなげて	ことば しゃしん 言葉と絵や写真を つなげて 考える	【例】1年生:「くばしば」。 【例】2年生:「はなから」。 【例】3年生:「はなから」。 【例】4年生:「はなから」。 【例】5年生:「はなから」。 【例】6年生:「はなから」。	【例】1年生:「くばしば」。 【例】2年生:「はなから」。 【例】3年生:「はなから」。 【例】4年生:「はなから」。 【例】5年生:「はなから」。 【例】6年生:「はなから」。
1 なりきって	はなし じんぶつ お話を中の人物や ひと お話を書いた人に なりきって考える	【例】2年生:「お手本」。 【例】3年生:「ああ、いども。」がくくんと言いました。 【例】4年生:「○のだった…ふういう氣、 自分がならから、がくくん。ふうな気持 になると思います。」	【例】2年生:「お手本」。 【例】3年生:「ああ、いども。」がくくんと言いました。 【例】4年生:「○のだった…ふういう氣、 自分がならから、がくくん。ふうな気持 になると思います。」

岩邑小学校

「そうか!」「できた!!」「わかった!!!」

～問題解決の喜びを自ら獲得できる児童の育成～

【研究内容1】

学習内容を定着させるための単位時間の工夫

- (1)課題の明確化を図り、解決するための見通しをもたせる指導・援助の工夫
- (2)3つの見届け（実態・学習状況・定着状況）の工夫

学習状況の見届けにICTを有効に活用している

「実態を見届ける」「学習状況を見届ける」「定着状況を見届ける」の「3つの見届ける」を大切にすることは共有されており、先生方も意識して実践していることだと思います。

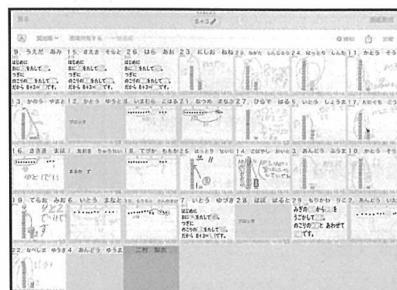
今回、「学習状況を見届ける」ために、ICTを活用し、学習状況や定着状況の確認をしながら授業を進めていくことができました。

2年生の「かけざん」の学習では、子どもたちが並べたおはじきを写真に撮り、ロイロノート上で「ひとつ分」のまとまりを線で囲い、説明図をつくっていました。全員の説明図を短時間で把握し、3パターンの並べ方が確かめられるよう、意図的指名につなげていました。

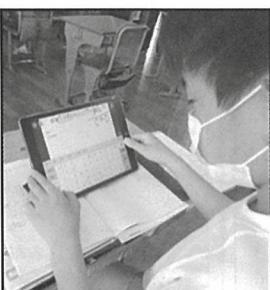
3年生の「分数」の学習では、意図的指名によって、全体交流を組織化しようと取り組んでいました。教師が、子どもの思考を整理できるような発表の順番をコーディネートすることで、自らの考えをもち、仲間と学んでいるという実感を持たせ、主体的に表現する子どもを育てるこにつながっています。

このように、学習状況の見届けの観点が明確で、そのための有効なICT活用方法があれば、今まで以上に「学習状況の見届け」が的確となり、子ども達への意図的で確実な指導ができるようになります。

さらに、今回の岩邑小学校では、どの学年も、評価問題をロイロノートで提出の際に、その時間の学びの自己評価として色分けして提出させ、教師側が確実に評価を行い、できていない子へ声かけをするなど丁寧な見届けがされていました。



【ワークシートの色分け例】



【ヒントカードを活用する児童】

【研究内容2】

児童が自らの考えをもち表現するための指導・援助の工夫

- (1)理解を深めるための見方・考え方を引き出す指導（図の活用・手の動作・話型等）の工夫
- (2)考え方を表出する場の設定と共有化の工夫

主体的・対話的、深い学びにつながる『児童が学びを進めいくための手立て』を明確にしている

教師がタイミングよく思考を促す発問、これは深めの発問と呼ばれることが多いのですが、それを行うことによって、もっと深く考えようとする、思考の選択肢を増やす手立てとなっていました。

1年生の「たしざん」の学習では、8+3の計算の仕方を「ブロック」と「図」のどちらかを選んで考えました。自分にとってわかりやすい、説明しやすいほうを選んでいることで、どの子も考えをまとめることができました。

また、今回の授業の中で、考えを資料箱へ提出し、すぐにテレビ画面に映すのではなく、児童同士で共有するタイミングを工夫していました。こうした交流のタイミングの工夫が、子どもたちにとってより考えようとする意欲や、効果的に多様な考え方につながりました。

5年生の「割合」の学習では、数直線図と言葉の指揮の共通点を明らかにし、公式化につなげる深めの発問を準備していました。子どもたちは、教師の言葉を受け、「うーん」「確かに似ているな」「どこかな」とつぶやきながら考えをめぐらす姿が見られました。



整備した「岩邑小の算数授業スタイル」を活用することで、今年度と別の学年担当になっても、メンバーが新しくなっても同じように実践することができます。子どもたちも同じ流れで戸惑わずに学習に向かうことができ、今年度の、岩邑小学校の財産となりました。

特集 道徳教育パワーアップ実践事業 報告

長島小学校

自己の生き方についての考え方を深める子の育成

～学び合いを通して考え方を深める道徳授業を軸として～

〈研究内容1 年間指導計画における目指す姿の明確化〉

各学年で、その月に行う授業内容や内容項目を確認し、授業後の児童の出口の姿を共有することを大切にしています。また、学校行事や各教科との関連を意識した確認と見直しを行いました。

〈研究内容2 生き方についての学び合い、考え方を深める道徳授業の在り方〉

①導入の工夫 第5学年 C勤労、公共の精神 「クール・ボランティア」

「どんなボランティアをしたことがありますか」のアンケートを行うことで、教材と自分の体験をつなぎ、自分事として考えることができました。また、終末の自己を見つめる時間で、高まった道徳的価値を確認するために有効な手立てとなりました。



②発問の工夫 第1学年 B親切、思いやり 「くりのみ」

うさぎさんの気持ちを十分に考え交流した後、「この後きつねさんは続けて何て言うかな」という役割演技を入れることで、発達段階に適した言葉を使って、多角的、多面的な意見を引き出すことができました。

③終末の工夫 第4学年 C勤労、公共の精神 「琵琶湖のごみ拾い」

働くことの価値に気付き、「1家庭1ボランティア」の取組での保護者からの「すごく助かって嬉しかったよ。」というメッセージを扱うことで、道徳的な実践意欲と態度を高めるための有効な手立てとなりました。



〈研究内容3 家庭や地域と連携し、「三学の精神 志教育」の充実〉

教育活動における道徳教育を充実させるために、家庭と地域との連携を大切にしています。特に学林活動を中心に、学校運営協議会と目的を共有し、地域の方から学ぶ、地域の方との関わりを深める取組を行っています。具体的には、地域防災Day、学林間伐体験、外部講師によるいのちの授業、1家庭1ボランティアの取組などを行いました。

特集 東濃地区へき地複式教育研究大会 報告

飯地小学校

自ら求めて学ぶ子の育成

～地域人材を活用したふるさと教育を通して～

〈研究内容1 地域の特性を生かした授業づくり〉 第1・2学年 生活科「町探検」

高齢者施設「まんさく」を利用している人達に町探検で発見したことを発表する授業を行っていました。発表会では、自分の考えを言葉できちんと伝えることができたこと、声の大きさを意識して発表できたり、地域の人に聞いてもらうための手立てが有効でした。参観していただいた人から「上手だったね。」と感想をいただいたことで、自分の発表を聞いてもらえたことの喜びを感じて、発見したことをさらに伝えたいという思いをもつこともできていました。



〈研究内容2 主体的に学ぶ授業づくり〉

第3・4学年 総合「篠島小学校との遠隔交流授業」

飯地地域とは違う環境にある島の小学校、愛知県の篠島小学校の児童と遠隔授業を行っていました。飯地高原自然テント村、飯地の食材を使った食品について調べたことを篠島小学校の児童に紹介しました。篠島小学校の児童から感想をもらったことで、飯地の魅力に改めて気付いていました。



〈研究内容3 発信する力の育成〉 第5・6学年 総合「地域のことを発信しよう」

広報誌作成と動画作成を同時進行して行うため、それぞれにリーダーをつくり、リーダーが中心となって活動を行っていました。リーダーがスムーズに活動を進めていくことができるよう、事前に担任と打ち合わせをし、1時間の流れを確認する手立てを行っていました。

広報、動画とも作成が終わると、それぞれのグループの仲間とねらいに沿った内容であるか、読み手が読んで分かりやすい内容であるか、文字の間違いないか等について点検を行っていました。仲間の作品のよさを見つけて次回の自分の作品作りに生かしたり、仲間のアドバイスからもっとこうすればよいと気付いたりしていました。



遊びは子どもがきめる!

岩村こども園

岩村は、女城主の里として知られ、町の中央に伸びる本通りには、当時の面影を残す旧家が残っています。下田歌子、佐藤一斎など数々の偉人も輩出した学問の町の中に一つのこども園。親子遠足は、お城山に向かう長い登り坂の随所に歴史を感じながら歩きます。



乳幼児期の遊びは

岩村こども園には、0歳から5歳児まで113名が登園してきます。朝は、子ども達の一日を決める大事な時間と位置づけ、寒い冬の朝もこっちで縄跳びをする子、ボールつきをする子、それを引っ張っている子、フラフープを回す子、貰った馬酔木の枝をちぎって笑っている子、ドッジボールを手に仲間集めをしている子の姿があります。粉雪が舞う朝「さあ！少し寒いけど元気に体操をするよ！」の放送当番の先生の声に園庭のおもちゃを手際よく片付けた子ども達は「はーい！」と返事を返して並び始めます。年長組のお当番さんは、みんなが遊んだ園庭の丸テーブルの泥を庭ほうきで、せっせと掃きおろし、じょうろの水で洗い流して、明日の遊びに備えることも日常の風景となりました。遊び中も、冷たい水をせっせとバケツで砂場に運ぶ子ども達を見れば、「この寒いのに」と、つい口を出したりしますが、掛ける言葉は、「袖口を上げておくと濡れないよ」だけ。余分な大人のひととは、子ども達がわくわくしながら遊びに向かう気持ちを萎えさせ、終止符を打ってしまうから。冷たくて遊びを続けるかやめるかは子どもが決めることです。職員の学習会で、「子どもの遊びは何故大事？」「どんな環境作りが必要？」「人的な環境ってどんなこと？」を話し合いながら試行錯誤を繰り返してきました。保護者の方にお願いして、いらなくなつたキッチン道具を貰い、職員は子どもの遊びやすいキッチン台を作る所から始めた砂場回り。水を汲みやすい様にカランをひねれば水が出る水場を作ったことで、ごっこ遊びがどんどん広がっていました。



温故知新

大人は子どものモデル

心に残る遊び・授業・先輩・職員



白いランニングシャツにハーフパンツと革靴。これが中学生時代の部活顧問の練習着です。

中学入学当初、私はテニス部希望でした。でもバレーボールの活気に惹かれ、入部を決めました。青空の下、バレーコートの元気な声の中にその顧問の先生はいました。たばこはパイプ派、担当教科は英語。授業中、あの頃は割と珍しかったほぼall Englishで説明と質問がとぶので、意味が分からぬ私は毎回ヒヤヒヤしていました。

その先生はバレーボール未経験者でした。運動が得意なタイプでもなかったと思います。でも、練習のボール出しをしたり、プレー中に叱咤激励大笑いの声が聞こえたり…と、物怖じする様子は微塵も感じませんでした。女子中学生を相手に自分らしさ全開で、自分のミスすら楽しげに活動をする先生の姿に部員達

まねる事が学びを広げる

先日、年中組の子が手作りの凧を飛ばし始めた所、その凧の良く飛ぶこと！それを見ていた年少さんもやりたくなって「よし、年少組も教えて貰って作ろう！」の元気な担任の声と共に子ども達が部屋に駆け込んで行ったと思ったら、午後からは年中組の黄緑帽子に交じって、年少組の水色帽子があちこちで凧を手に走っています。……と翌日には年長組の紫帽子も交じって園庭は凧だらけとなりました。

水色と緑色のビブスを着た年長さんがドッジボールの対戦をしている横で、黄色と赤色のビブスを着た年中さんが同じ様にドッジボールを始める姿、時には、年少さんから年長さんまで混じってサッカーゴールに向かって走る姿もあります。いいモデルを見てまねをすることが、子どもの「できた！」を増やす近道だと考えます。令和5年4月から施行される子ども基本法には、「すべての子どもは、自己に直接関係する全てに意見を表明し参画することが保障される」とあります。乳幼児期は、子ども自身が自分で選んでいく遊びや生活が大事ということです。お店屋さんごっこで、車を作り中のS君「やった！こんないい物をみつけちゃった、みて～」と周りの子に飲むヨーグルト容器を自慢気に見せ回る姿に、廃材が「いいもの」に見えるS君の思いが伝わってきました。

新たな保育理念のもと

令和4年9月に出来た岩村こども園の新理念は「遊びは学び～決めて考えて作り出し仲間と育つ子～」です。子どもの遊びは大人が常に決めた枠の中に入れて引っ張っていくことではない！子どもが決めて、友達と一緒にやりたいことができる環境、いつでも自分の思いがあんきに出せ、間違ったら笑ってやり直せる自由が常にあります。職員の合言葉は「子どものやることには訳がある！」その訳を、解って待って、一緒になって盛り上げてやろうと日々取り組んでいます。

地域の方に応援してもらって…

岩村は、保育園時代から地域の方に理解を頂き、遊びや仕事をすることを大事に保育してきた園です。毎月の園だよりを町内に回覧する様になり、町の方から「岩村こども園は楽しそうだね」「大事な所は子育てしている娘に写メ取って送るよ」等、声を掛けてもらうことが増え、ありがとうございます。第三者評価においても、こうした地域との繋がりを好評価して頂きました。これからも応援して下さる地域の方に感謝しながら元気なこども園を目指したいです。

上矢作中学校 校長 市岡 早苗

は元気をもらい、職員室の窓の外から「練習に来んの～？」と呼んでいた気がします。

この先生、確かにいで立ちから目立ちますが、明らかにかつこよくはありません。では何に惹かれたかと思い返した時、『ミスを恥ずかしがらず、他人の目を気にせず、ありのままの自分で人（子ども）と向き合う姿勢』だったのだと、大人になった今ではわかります。

大人は子どものモデル。特に教師は、子どもが家族以上に一日の多くの共に過ごす大人です。それぞれの教師がいろいろな場面で自分らしい姿を見せるることは「自分もあんな風になりたい」という、子どもの生き方に繋がることもあるのではないかでしょうか。実際、この恩師の影響もあってバレーボールが好きになりました、教員になつたりしている自分がいます。

学校の先生方が生き生きと働き、素の自分を出してくださることが、広い意味でのキャリア教育にもなると強く思う今日この頃です。